

225 Immuradiometric assay(IRMA)による血中活性型レニン濃度測定に関する基礎的ならびに臨床的検討
村上 稔, 末廣美津子, 濱政明宏, 福田容子, 尾森春艶, 福地 稔 (兵庫医大, 核)

今回、我々はモノクローナル抗体を用いた血中活性型レニン濃度の直接測定用IRMA法につき、基礎的ならびに臨床的検討を行った。

基礎的検討ではほぼ満足出来る結果を得た。健康人23名の血中活性型レニン濃度は、6.2 ~ 22.2 pg/ml(平均12.8±4.4pg/ml)であった。一方、未治療の原発性アルドステロン症2例では、1例は最小検出濃度(2.5pg/ml)以下、1例は3.0pg/mlと健康人に比し著しく低値を示し、腎血管性高血圧症患者10例では平均276±268pg/mlと著しく高値であった。血漿レニン活性値と血中活性型レニン濃度との測定値の比較では、相関係数 $r=+0.885$ と正の相関関係が認められた。

226 活性型レニン濃度測定法の基礎的および臨床的検討

大塚英司, 市原 真 (大和市立病院・R1室)

従来レニンの測定は、血中のアンギオテンシノーゲンを基質として、酵素的に生成したアンギオテンシンIをRIA法で測定してきたが、レニンに対するモノクローナル抗体を用いてレニンを直接測定する方法が開発された。本法の基礎的検討として、標準曲線、Inter-およびIntraassay Variation、希釈試験、回収率試験、インキュベーション時間、さらに血漿と血清レニンの比較検討、また従来のレニン活性値との相関関係を検討した。臨床的検討として、健康成人60名につき年齢別、性別の活性型レニン濃度を測定した。各種高血圧症例150名について活性型レニン濃度を測定し、従来のレニン活性値を基準に分類し、比較検討した。これらの結果、本法の有用性について報告する。

227 2-5A合成酵素活性測定法の基礎的検討と健康人におけるIFN- α , γ 産生能との比較

毛呂 督, 堀野嘉宏 (ファルコイムノシステムズ)
喜多正和, 岸田綱太郎 (京都パストゥール研究所)

インターフェロン産生能測定法(全血法)は、採血後5時間以内の血液を対象とし、結果を出すのに最低5日間を要する。そこでIFN産生能と相関する他のパラメーターを調べるため、IFNにより誘導される酵素の一つである2-5A合成酵素に着目し、血清2-5A合成酵素(2-5Aキット‘栄研’)とIFN産生能との関係を検討した。

本研究において、健康者の血清中2-5A合成酵素値と α 型IFN産生能との間に相関が認められたが、今後ウイルス性疾患患者や癌患者における両者の関係を検討していく予定である。

228 髄膜炎における髄液中の2-5A合成酵素活性およびネオプテリン測定について

荒井 孝, 山本英明, 坂本正文, 池井勝美, 橋本 宏, 関 孝*, 大石 勉*, 城 宏輔*, (埼玉小児科, 感免*)

2-5A合成酵素活性(2-5A)は、IFN治療およびウイルス感染症に際して、種々の細胞より分泌され、血清中においてその活性が高値になることが知られている。ネオプテリン(Ne)は γ -IFNによって活性化されたマクロファージなどによって産生されることから細胞性免疫反応の指標として注目されている。今回小児の無菌性髄膜炎6例、化膿性髄膜炎8例を中心に、髄液中の2-5AおよびNeを測定し検討した。

髄液中2-5Aは無菌性327.8±442.7pmol/dl、化膿性1384.4±2127.4pmol/dlであり統計学的有意差は認められなかった。一方、髄液中Neの比較では無菌性10.80±5.04ng/mlに比べ化膿性60.05±27.49ng/mlと有意の差($P<0.01$)が認められ鑑別の指標として有用と思われた。

229 ATL疾患におけるチミジン(TK)活性と腫瘍マーカーとの対比および癌疾患におけるTK活性

計屋憲實, 岩崎宏司, 新野 順, 木下博史, 林 邦昭
(長崎大放射線部) 貞森直樹, 川内孝子 (同大原研内科)

TKは、チミジンがDNA代謝に組み入れられる時に関与する触媒酵素で、細胞分裂増殖の指標の一つと考えられ、DNA代謝異常を伴う悪性腫瘍やウイルス感染によって亢進する事が知られている。我々は、ATL疾患や癌疾患での血清中TK活性を測定、各種腫瘍マーカーと比較検討した。ATL疾患でのTKは、急性型ATL、リンパ腫型ATL、慢性型ATLの順に活性が有意に高かった。またATL疾患について5種の腫瘍マーカー(LDH、 β_2 MG、Ferritin、CEA、TPA)と対比、TK活性はLDHとのみ相関した(相関係数 $r=0.783$, $n=38$)。また今回測定した癌および良性疾患でのTK活性は正常値のおよそ2倍程度であった。

230 癌性胸膜炎・癌性腹膜炎におけるシリアルLe^x-i抗原(SLX)の臨床的検討

加藤義郎, 辻野大二郎, 高橋利明, 和田祐爾, 米島正博, 鈴木敏夫, 染谷一彦 (聖医大第三内科) 高橋孝子, 山下あけみ, 菊池いずみ, 岡田崇子 (聖医大放射線部核医学科) 佐々木康人 (東京大学放射線科)

シリアルLe^x-i抗原(以下SLX)はII型糖鎖抗原であり、肺腺癌、卵巣癌、膵癌などで高い陽性率を示し、また、偽陽性率が低く癌特異性が高いといわれている。今回、我々は、SLX「オーツカ」を使用する機会を得たので癌性胸・腹水および良性胸・腹水における検討をおこなった。胸水では癌性、良性ともSLX濃度に差はみられなかったが、腹水では癌性、良性で明らかな差がみられた。また同一患者での血清中SLX濃度は悪性疾患と良性疾患で明らかな差がみられた。